資料2

Better Hearing Journal 27,1,2004 巻頭エッセイより

補聴器とサウンドスケープ

独立行政法人国立特殊教育総合研究所
佐藤　正幸

私自身、聴覚障害児教育の研究に関わっていると同時に装用歴40年余りの補聴器ユーザーである。最近、自分自身の補聴器のフィッティングをし、活用するとき、あるいは教育相談の子どもの様子を見るとき、特に関心を持っているものがある。これは音声言語以外の音体験である。これまでの補聴器を活用した生活を振り返るとき、音声言語によるコミュニケーションも1つの体験ではあるが、それだけには留まらなかった。例えば、毎朝、研究所前の海岸を歩いて出勤するとき、波の音や船の汽笛をきいて心が安らぐと同時にきょう一日やるぞという気にさせられる、駅などの雑踏の中でいろいろな音の響きをきいてその場所がいかに広いかを感じ取る、かすかに鶯の鳴き声がきこえ、春が来たんだなぁ～と感じるということがこれまでの生活の中で度々あった。

教育相談の中でも、同じようなことがあった。あるとき、補聴器を装用している子どもが「ざーがきこえなくなっちゃったよ！」といってきた、最初、私はこの子どものいっていることが即座に理解できなかった。よくよく考えてみると、この子どもの場合、つい最近アナログ補聴器からデジタル補聴器に替えたばかりで、今までのアナログ補聴器だとスイッチをいれるとまわりに音がなさそうな状況でもかすかにふく風の音が入り、「ざー」がきこえていたのが、デジタル補聴器のノイズリダクションの作用でこの「ざー」という音すらきこえなくなっていた。子どもにとって、アナログ補聴器を通してきこえる「ざー」という音は、補聴器が作用している、電池があるという安心感をもたらしていた。さらには、子どもにとって「ざー」という風の音は一種のやすらぎにつながるものと考えられた。ところが、デジタル補聴器に替えた途端にそれがなくなり、子どもは違和感を感じたのだと思う。

このような、音声言語によるコミュニケーション以外の体験について、どのように考えていいのかしばらく迷っていたところ、4年前のあるテレビ番組がきっかけで「サウンドスケープ」という言葉を知った。「サウンドスケープ」はカナダの作曲家であるマリー・シェーファーによって提唱され、日本語では「音の風景」といわれている。これは人間の音体

験を、音響学的な観点というよりも社会や生活の変化、時代の様相や変貌を理解するという、すなわち社会学や人間学の視点からみるというものである。

補聴器を装用している子どもの音体験を数年前、私の恩師である今井秀雄先生（国立特殊教育総合研究所名誉所員）と議論させて頂いたことがある。その際、今井先生からご示唆頂いたのは、子どもたちの聴覚活用における行動には、おそらくは次の３つが挙げられるということである。すなわち、

- きこえることによって行動を起こす
  (The movement through hearing)
- きこえることによって情緒を感じる
  (The feeling emotion through hearing)
- 音をきくことによって環境に関する情報を得る
  (The awareness of environment through the orientation sounds)

確かに、補聴器を装用すると音声言語だけではなく、これらの行動も十分に考えられる。さらには、サウンドスケープの視点も入るものと思われる。

本来、サウンドスケープは、従前の音響学的研究にみられた実験室の中で被験者に音の評価を云々するようなやり方に対する疑問から生まれたものであり、音と人とのかかわりを広く観察してみようという考えが含まれている。同じように、補聴器の活用についても、どのくらいの利得で語音明瞭度が上昇したとかいう数学的な観点からみるよりも、補聴器を通してきく、子どもたちの音に対するイメージ、例えばママの声をきくと安心する、音が物足りないというような音体験を広く観察し、補聴器活用の支援を考えていく必要があるのではないだろうか。